

# 慧思における有相・有相行について

加藤 高敏

## 問題の所在

中国天台教学の大成者である天台大師智顛（五三八―五九七）の師である南岳慧思（五一五―五七七）は、『法華経』に基づいた実践である法華三昧を無相行、その法華三昧の前方便である実践を有相行と規定した。<sup>(1)</sup> 有相行は『法華経』普賢菩薩勸発品によって、無相行は『法華経』安樂行品によって規定した。しかし『法華経』の中では、これらの『法華経』に基づいた実践に、有相・無相の語はあてられていない。先学の研究においても有相行・無相行について論じられたものは数多くあるが、有相・無相について詳細に究明されたものはない。<sup>(2)</sup> そこで慧思の法華三昧を究明するにあたり、まず前方便である有相行を明らかにする必要がある。

本稿では慧思が何を典拠に有相という概念を援用し、『法華経』の実践にこの語をあてたのか、また有相という概念を慧思はどのように捉えているのかを究明することによって、

慧思の有相行という実践を明らかにしたい。

ちなみに慧思は自らの著の中では、有相・有相行について詳細に述べていないため、慧思が援用したと考えられる『大品般若経』（有相・有相行について「次第学品」「一心具万行品」の二品のみが詳細に説いているため、この二品により究明した。）『大智度論』、また弟子の智顛の著や高麗の諦観の著した天台教学の綱要書である『天台四教儀』を参考に有相・有相行について究明したい。

## 一 『大品般若経』『大智度論』における有相・有相行

『大品般若経』巻第七五次第学品には、

阿耨多羅三藐三菩提を得已<sup>(3)</sup>つて、一切衆生の有相を行ずるに、当に無所有の中に住せしむべきなり。

とあり、一切衆生が有相を行ずることが説かれる。さらに『大品般若経』の釈文である『大智度論』には、

一切法の中に於いて有相を生ぜざるは、即ち是れ修道なり。<sup>(4)</sup>  
有相有量なるが故に捨てて阿耨多羅三藐三菩提を得べし。<sup>(5)</sup>

とあり、見修道によつて、一切の対象に対して有相を生じなくなる」と説かれている。つまり有相とは、仏教の道理が分からない見惑であり、また現前に展開する事物や現象に執われ、心を振りまわされる思惑のことである。その有相有量を捨てることによつて阿耨多羅三藐三菩提を得ると説かれている。『大品般若経』巻第七六一心具万行品には、

「諸の相を得る者は、道あることなく果あることなく、阿耨多羅三藐三菩提あることなし」と。須菩提、仏に白して言さく、「世尊よ、相を得ること無き者は、道あり果あり、阿耨多羅三藐三菩提有りや不や」と。「須菩提よ、無所得はすなわち是れ道、すなわち是れ果、すなわち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。…」と。<sup>(6)</sup>

とあり、同じく『大品般若経』巻第七六一心具万行に、  
菩薩摩訶薩は、無相の法の中に能く般若波羅蜜を具足す。<sup>(7)</sup>

とあり、有相を断じ無相を得ることが阿耨多羅三藐三菩提であり、般若波羅蜜を具足することであると説かれる。

また『大品般若経』巻第七五次第学品に、

菩薩摩訶薩の行ずる所の次第学・次第道とは、過去の諸の菩薩摩訶薩の行ずる所の道、阿耨多羅三藐三菩提を得るが如し。<sup>(8)</sup>

とあり、また『大智度論』巻第八七には、

諸法は空にして解し難しと雖も、次第に行じ、力を得るが故に、能く成就することを得。<sup>(9)</sup>

とあり、次第に段階的に有相を対治することにより、阿耨多羅三藐三菩提や諸法を空と観ずる般若波羅蜜、つまり無相を得るとされる。しかし『大品般若経』『大智度論』においては、その実践を有相行・無相行とは規定していない。

## 二 慧思における有相・有相行

慧思は自らの著である『法華経安楽行義』の中で有相行について、

また次に有相行は、これはこれ普賢勸発品の中、「法華経」を誦すに、散心に精進す」と。是の如き儀の人、禅定を修せず、三昧に入らず。若しは坐し、若しは立ち、若しは行ずるに、一心に専ら法華の文字を念じて、精進して臥せず。頭然を救うが如し。是れ文字の有相行なり。<sup>(10)</sup>

とあり、有相行はあらゆる場面において、専ら『法華経』を受持し、読誦する実践であり、禅定や三昧の状態に入る実践ではないと説く。同じく『法華経安楽行義』に、

一地一地に至らざるは、是れ利根の菩薩の正直に方便を捨てて、次第の行を修せず。若し法華三昧を証すれば、衆果悉く具足す。<sup>(11)</sup>

とあり、法華三昧の実践、つまり無相行を不次第の行であるとしている。またそのことから慧思は、法華三昧の前方便で

ある有相行を次第の行であるとして考えると考えられる。

このように慧思は無相行を不次第行と規定していることから、『大品般若経』『大智度論』と慧思の概念規定に違いが見られる。これについては、『続高僧伝』巻第十七に智顛が慧思に代わって『大品般若経』を代講した時の話がある。<sup>(12)</sup> 智顛は文を追って釈し、講義したのであるが、「一心具万行品」の処に至って、疑問をもった。「次第行品」において、十地を次第に行じ、次第に学ぶ次第道が説かれているが、その直後の「一心具万行品」によって一心一念に万行を具すと説かれていたことに疑問をもった。これに対して慧思は、一心具万行とあっても、『大品般若経』を講義する立場においては、大品次第の意に解すべきであって、法華円頓の意に解してはならないと述べている。しかし慧思は、自らの実践体系を築くにあたっては、法華三昧の境地は般若空観の境地を超越したものであるとし、『大品般若経』『大智度論』の有相・無相の概念を援用しつつも、有相行を次第の行、無相行を法華円頓の不次第の行と規定した。

また慧思が有相行を、一心に『法華経』を受持・読誦する行であると規定したのは、慧思は出家後の十年間は常に『法華経』等の読誦に専念し、その後坐禅へと向かい三カ月の実践の後に法華三昧を悟ったことから、法華三昧の前方便として一心に『法華経』を受持・読誦する実践を有相行と規定し

慧思における有相・有相行について(加藤)

たと考えられる。<sup>(13)</sup>

このように慧思は、有相について『大品般若経』『大智度論』によって援用したのであるが、これら二経には有相行という実践については詳しく述べられていない。慧思も自身の著作において有相について詳細に述べていないので、慧思の弟子である智顛の著作である『摩訶止観』や、高麗の諦観の著した天台教学の綱要書である『天台四教儀』より有相行について究明したい。

智顛の著である『摩訶止観』巻第二には、

南岳師のいわく、「有相の安楽行、無相の安楽行」と、あに事・理について、かくのごとき名を得るにあらずや。特にこれ行人が事<sup>(14)</sup>に涉つて六根の穢を修して悟入の弄引となすが故に有相と名づ

とあり、有相行とは、事という現前に展開する一切の対象に執著している現状を懺悔する、悟りに入る方便の実践であると説かれている。この事の懺悔について『天台四教儀』には、

五悔と言うは二有り、一つは理、二つは事なり。…事懺と言うは、昼夜六時に三業を清浄にして、尊像に対して過罪を披陳す。無始より已来、今身に至るまで、凡そ造作する所の殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血、邪淫・偷盜・妄言・綺語・両舌・悪口・貪・瞋・癡等の是の如き五逆・十悪及び余の一切を意に随つて発露し、更に覆蔵せず、ふるきを畢えて新しきを造らざるなり。若し是の如くなれば則ち外障漸く除き、内観は増ます明らか



つまり慧思の説く有相行とは、専ら『法華経』の受持・誦誦する実践であり、それとともに常に仏に対して罪過を告白する懺悔を行わずの実践であり、それらを次第に段階的に実践することで有相である一切の対象や、それらの対象に心を振りまわされる見思惑を対治し、身・口・意の三業を清め、五逆・十悪業を行わせないようにする、仏道修行の初期段階で行じられる法華三昧の方便の実践である。

- 1 『隋天台智者大師別伝』(大五〇・一九二a)。
- 2 慧思の有相行・無相行について述べられる先学の研究として、安藤俊雄「慧思の法華思想」(『山口博士還暦記念 印度学仏教学論叢』所収、一九五五年、法蔵館)、横超慧日「南岳慧思の法華三昧」(『法華思想の研究』所収、一九七五年、平楽寺書店)、新田雅章「天台実相論の研究」(一九八一年、平楽寺書店)、佐藤哲英「続天台大師の研究」(一九八一年、百華苑)、大野榮人「天台止観成立史の研究」(一九九四年、法蔵館)、菅野博史「慧思『法華経安楽行義』の研究(一)」(『東洋学術研究』第四十三巻第二号、二〇〇四年)、鶴田大吾「『法華経安楽行義』の無相行と有相行の再考」(『東アジア仏教研究』五号、二〇〇七年)、拙稿「慧思の有相行について」(『曹洞宗研究員紀要』第四二号、二〇一二年)、拙稿「慧思における四事供養について」(『東海仏教』第五八輯、二〇一三年)、等がある。
- 3 『大品般若経』卷第七五(大八・三八四b)。
- 4 『大智度論』卷第八六(大二五・六六五b)。
- 5 『大智度論』卷第八六(大二五・六六六a)。

慧思における有相・有相行について(加藤)

- 6 『大品般若経』卷第七六(大八・三八六b)。
- 7 『大品般若経』卷第七六(大八・三八九c)。
- 8 『大品般若経』卷第七五(大八・三八四c)。
- 9 『大智度論』卷第八七(大二五・六六九a)。
- 10 『法華経安楽行義』(大四六・七〇〇a-b)。
- 11 『法華経安楽行義』(大四六・六九八c)。
- 12 「汝が向きに疑う所は、此れすなわち大品次第の意のみ。未だ是れ法華円頓の旨にあらざるなり。吾むかし夏中に苦節して此れを思う。後夜の一念、頓かに諸法を発こして、吾既に身証して疑を致すを勞せず。」『続高僧伝』卷第十七(大五〇・五六三b)。
- 13 「時に、慧思禪師あり。武津の人なり。名は高嶺よりも高く、行は伊洛よりも深し。十年常誦、七載方等、九旬常坐し、一時に円証す。」『隋天台智者大師別伝』(大五〇・一九一c)。
- また、「修行の方法を有相行と無相行に分けたのは、北朝の仏教界が読誦と坐禅のみを重んじたこと、智度論卷四十一などにも菩薩には誦経と坐禅との二種ありといっていること等に関係がある。」(横超慧日『法華思想の研究』二七八頁、一九七一年、平楽寺書店)。
- 14 『摩訶止観』卷第二上(大四六・一四a)。
- 15 『天台四教儀』(大四六・七七九a)。
- 16 『天台四教儀』(大四六・七七九b)。
- 17 『法華経安楽行義』(大四六・七〇〇b)。

〈キーワード〉 慧思、有相、有相行、『法華経』、中国天台

(愛知学院大学大学院研究員)